

生徒が学ぶ喜び、分かる喜びを味わえる授業の工夫

<b>学力向上推進員</b> 久米輝 (3学年主任) 石田靖奈	<b>委員</b> 校長 滝川尚、教頭 原裕則、遠藤明子 1学年主任 矢野耕資(学年学力担当)、 2学年主任 榎井美保、教務主任 藤川靖
--	--

滝川 尚

【各校の取組状況の把握について】

日々の教職員同士の対話、管理職への報告など、様々な機会を捉え、取組状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○生徒は真面目に授業に取り組むことができている。学力を定着させるために、課題を行い、提出する生徒が多い。 ●学習に対して苦手意識を持つ生徒と意欲的に取り組む生徒との二極化がすすんでおり、それに対する支援の在り方が課題である。タブレットの活用にな慣れである。	○高い目標を持ち、向上心を持ちながら知識・技能の習得に喜びを感じ、繰り返し学ぶことができる。 ○学習に苦手意識がある生徒もスモールステップを経て、分かる喜びを感じることができる。 ○タブレットを授業で活用することができる。	○小テストなどを活用し、繰り返し行うことでどの生徒にも分かる喜びを実感や体験させる。 ○相互参観授業やメンター制度を活用し、教師の授業技術を共有する。また、授業紹介や教科会などで授業技術を共有する土壌を醸成する。 ○タブレットを使った宿題を出す。	○ステップアップや全国学力調査の結果分析から、授業に対する分かる割合の増加が課題であると分かった。授業改善がより必要である。繰り返し学習することで定着を引き続き図っていく。 ○生徒用タブレットの活用を行い、相互参観授業を行うことで授業実践を共有する。	○1、2学期に相互参観授業週間をそれぞれ2週間程度実施した。教科問わずに参観することで、刺激をうけ、授業手法の改善につながっていた。 ○総教センターのホームページからダウンロードした ICT 活用方法の資料等を職員室に掲示し、タブレット活用につなげた。	○相互参観授業週間は有意義ではあるが、参観できなかった先生方がいたなど、実施期間に課題が残る。 ○タブレットなどの活用法の研修を短時間で多くの回数を実施したり、支援員と協力を強化する。 ○教科部会を行い、知識・技能定着のための指導法やその効果についての情報交換をする。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○与えられた課題について前向きに考えたり、取り組んだりすることができる。 ●主体的に深く思考したり、筋道を立てて表現したりすることが苦手である。	○学んだことを生かして、深く考え、表現することができる。 ○仲間の意見を受け止め、さらにその意見について思考し、練り上げを行うことができる。	○MetaMojiなどを活用する方法などを研修し、生徒が自らの意見を級友と共有し、主体的に思考して表現する態度を育む。 ○思考・表現する機会を授業中に多く設け、出た意見に対して、さらに掘り下げる発問や思考ツールなどを利用し工夫する。	○生徒の話し合い活動(ペア活動、班活動)などを取り入れ、積極的に授業に取り組ませることで、思考力・判断力・表現力を育成し、知識の深化を図る。	○コロナが5類となり、様々な授業で、生徒同士で直接話し合ったり、まとめあつたりする活動が増えた。MetaMojiを効果的に活用する場面が多くなった。	○学んだことを生かして、深く考えて表現する機会をさらに多くの授業で取り入れるようにする。 ○思考力表現力の向上のための手法を年度の早い段階で教職員に提案・共有する。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○チャイム前着席が定着しており、授業の準備ができている。授業にも落ち着いて取り組むことができている。8割の生徒が毎日自主学習に取り組んでいる。 ●受け身の生徒が多く、主体的に学ぶことが苦手で、学ぶ喜びや分かる喜びを感じていない生徒がいる。	○学ぶ喜びと分かる喜び、表現する喜びを感じることで、様々な学習において、主体的に取り組むことができる。	○毎時間、目標やめあてを掲げる。 ○生徒の自己評価取り入れ、授業のまとめや定着状況の確認を行う。生徒が主体的に取り組むことができ、教師は生徒の定着状況を確認し、次の授業展開を工夫できる。 ○毎日家庭学習に取り組む生徒を9割、意欲的に取り組む生徒を4割に伸ばす。	○目標やめあての掲示作成を行い、教室全てに配置した。 ○自己評価を各教科で引き続き行ってもらい、生徒に自分の理解度を認識してもらう。 ○生徒の自主勉強ノートの毎日の提出を徹底させる。	○目標やめあてはどの授業も明示していた。その目標やめあてに対する自己評価を取り入れる授業も増えつつある。 ○毎日家庭学習に取り組む生徒は約8割であり、意欲的に取り組む生徒は約4割であった。	○生徒の自己評価やまとめの内容充実を図る。意欲的に取り組むためには、自己評価やまとめをすることで、理解が定着するという成功体験を生徒に積ませたい。 ○学校評価アンケートから、生徒の学習する習慣の定着には課題が残る。家庭学習内容を工夫させたい。

令和5年度 学力向上ロードマップ



